

椎葉村立尾向小学校の学力向上への取組

1 学校の概要

(1) 学校の位置

本校は日向市より国道327号線を経由して、県道142号線に入り、更に村道を約3kmさかのぼったところに位置する。(椎葉村役場より約15km)

本地区は、熊本県境に接する九州中央山地に源を発する耳川の上流・尾前溪谷沿いにあり、尾前地区と向山地区の2地区からなる。

(2) 学力向上と自己教育力の育成

基礎・基本を重視し、一人一人の児童に確かな基礎学力を身に付けるために、個を生かす指導を積極的に行っている。また、複式学級の授業の在り方についての研究を深め、少人数学級や複式学級のよさを生かしながら、算数科を中心とした学習指導法の工夫改善に努めている。併せて、業前や業間活動で取り組む内容を精選しながら、基礎・基本の定着、読む力(読書)の育成など継続的かつ効果的に進めていくようにしている。

本年度の校内研究は、昨年度に引き続き算数科を中心に研究を深めている。研究主題・副題を「学び合いを大切にし、自ら考え、自ら解決する力をもった児童の育成～一人一人が輝く算数科の学習指導の工夫を通して～」として、問題解決的な学習展開を基本とし、個を生かす指導やガイド学習など児童相互の学び合いを取り入れ、主体的・創造的に学習に取り組む児童の育成を図っている。導入の在り方や見通しのもたせ方、ガイド学習の進め方、練り上げの段階での指導、練習問題の工夫等に焦点を当てて取り組んでいる。

学力を支える基本的な生活習慣・学習習慣の育成については、落ち着いた生活態度の育成につながる「あいさつ、靴の整頓、清掃の3つの約束」を徹底するとともに、「学習の約束」や「学習用具の準備(机上)」「ノートの記事」等について全学年共通して指導している。また、必要に応じて家庭との連携にも心がけている。「知」「徳」「体」の到達目標についての取組については、目標ごとの取組を一層明確にし、評価計画に沿って実践→評価・検証という流れで進めている。

2 児童の実態

(1) 児童の実態

本校は全児童29名、3学級(2年生は単式、3・4年及び5・6年は複式)の小規模学校である。児童の学習に対する構え・態度は良好であり、日々の学習・活動に意欲的かつ真面目に取り組む姿が多く見られる。反面、学習活動が指示待ちになりがちで、自分から創意・工夫して活動したり、自分で次の課題を見つけて挑戦したりといった主体的な学習・活動はまだ不十分な面がある。

(2) 算数科における実態及び考察(6月実施のNRTより)

① 2年生

「数と計算」「量と測定」「図形」のどの項目において全国平均を上回っていて、算数に対しての興味・関心が高い。思考力を試される問題よりも機械的に計算過程を進めていけば解けるような問題を好む。今後更に、ゲーム的な要素や解法のコツがつかめるような指導方法の工夫をしていきたい。

② 3年生

「数と計算」「量と測定」「図形」のどの項目においても90%以上の正答率があり、学習内容の定着が非常によい。算数に対する興味・関心が高く、授業への取組も大変意欲的である。今後、この意欲を持続していくような指導方法の工夫改善を行っていきたい。

③ 4年生

「図形」の項目でかろうじて全国平均を上回っているものの、全体的に算数を苦手としている児童が多い。個人差がかなり大きい。特に「量と測定」の項目では、設問に対して無答が多かった児童がいて、前学年の学習内容が十分定着していないと考えられる。児童の個人

差に応じたきめ細かな手立てを取る必要がある。

④ 5年生

全体的に「数と計算」「量と測定」「図形」のどの項目においてもよく理解できている。算数に対する取組も意欲的で、個人差も少なく、学習内容の定着もよい。基礎・基本がしっかりしているため、単純な計算ミスや単位の見落としを防げば、さらに力が伸びる。

⑤ 6年生

全体的には授業に対する興味・関心は高く、取組もよい。基本的な計算技能は身に付いているものの、「量と測定」の項目では、全国の平均正答率より約9%低かった。既習内容をもとに考えることが苦手であるため、これからは、学習した内容を生活場面に結び付けられるような学習過程の工夫をしていく必要がある。

3 学力向上に向けた経営方針

基礎・基本の習得の手立て	学習環境の整備
① 個を生かす指導の工夫・改善	① 算数科の時間の約束
② 指導形態の工夫	② 尾向タイム（業前の活動）の充実
③ 評価の工夫	③ 算数の広場，算数コーナーの充実

4 教育課程内の取組

(1) 個を生かす指導の充実

① 学習過程の工夫

児童一人一人が主体的に学習を進め、確実にその時間の基礎的・基本的な内容を身に付け、その時間の目標を達成させる手立てとして、学習過程を明確にした。そして、児童の目につくところに、児童にわかりやすい言葉で書き直し、掲示した。児童が学習の流れを把握し、見直しをもって学習が進められるようにしておけば、限られた時間を有効に使うことができるとともに、次に何をすればよいか分かっている分、児童の意識も意欲も高まり、より学習の効果が上がるのではないかと考えたからである。

② 問題提示の工夫

児童の興味・関心を高めるような、効果的な問題提示の工夫をすれば、児童は主体的に取り組み、意欲をもって問題解決にまで至ることができると考えた。

本校では、効果的な問題提示を①児童の興味・関心を高めるもの、②児童の身近なものから題材をとったもの、の2つの視点から実践した。

ア 第5学年 単元「どんな計算になるのかな」(視点②)

- 尾向小学校みどりの少年団でキャンプに行き、夕食でカレーライスを作ることになりました。5年生が必要な材料をそろえなければなりません。さて、5年生はいくらはらえばいいのでしょうか。《買った物》・たまねぎ1kg ・牛肉1.5kg ・にんじん1kg

イ 第6学年 単元「単位量あたりの大きさ」(視点①)

- 孫悟空は250kmを2時間で、ベジータは390kmを3時間で飛ぶことができます。孫悟空とベジータでは、どちらが速いでしょう。

③ 算数的活動の工夫

特に、作業的な算数的活動、体験的な算数的活動、具体物を用いた算数的活動を授業の中に積極的に取り入れた。このことにより、教師誘導でなく、児童が主体的に楽しんで学習

【基本的な学習過程】		
学習段階	学習内容及び活動	教師の主な支援
つかむ	新たな問題と出会い、めあてをつかむ。	具体的な体験や事物、事象などに出会い、感動したり驚いたりしながら「なぜ」「どうして」といった考えをもたせ、めあてつかませる。児童の学習への必要感や知的好奇心をくすぐったり、生活体験からくる教材を選定する。
見通す	解き方や結果の見通しをもつ。	これまでの学習経験や生活経験をもとに、問題解決の方法や結果について予測したり、確認したりさせる。
調べる	これまでの学習の経験から、自力解決する。	算数的活動を取り入れたり、これまでに培った基礎的・基本的な知識や技能を使ったりしながら学び続ける意欲を保持させ、自力解決させる。活動にあたっては、活動の時間を保障する。また、児童の学習の様子を観察し、個を生かした支援を行い、自力解決を積極的に支援する。また、自分の考えが説明できるように、ノートやワークシート、ホワイトボード等にまとめるようにさせる。
まとめる	自分なりの考えを発表したり、友達のことを聞いたりして、よりよいものに練り上げる。	友達の思いや考えをしっかりと受け止め、自分の考えを深められるようにさせる。また、友達の考えのよさを認める心がもてるようにする。教師は、児童の立場に立って、つぶやきや発言に耳を傾けながら共感し、支援していく。そして、「簡単」「分かりやすい」「いつでも使える」の観点でまとめていき、評価問題で学習内容の定着をみる。
ひろげる	学習したことを生かして、練習問題を解くことができるか確かめる。 本時の学習を振り返り、問題解決への取組や理解度を評価する。	児童が進んで練習問題に取り組むように練習問題を工夫したり、生活の中で活用させたりすることにより、学習の達成感を感じられるようにする。また、学習した内容や自分の学習態度などについて自己評価する。

に取り組むことができ、活動することを通して、多面的なものの見方や多様な考え方を引き出すことができると考えた。

【ガイド学習の仕方（5・6年用）】

(2) 指導形態の工夫

① ガイド学習の活用

複式指導における間接指導時に、児童だけで主体的に学習が進められるようになり、自力解決の能力を高めるために、その仕方を書いたプリントを教室に常掲したり、ラミネート加工して児童一人一人に持たせたりして意識化を図っている。そして、学習の各段階において、自分の考えを明らかにするために話型に沿って発表させている。また、ガイド役の児童は固定せずに全員が経験し、話合いの基礎が培えるように配慮している。

② 学び合いの場の設定

児童相互の話合いや学び合いの場を設定することで、互いの意見を尊重する態度を育てることができると考えた。



【ガイド学習における意見交換】



【自分の考えをボードで発表する】



(3) 評価の工夫

① 教師による評価

「まとめる」と「ひろげる」の段階の「評価問題」と「練習問題」でこの時間の基礎的・基本的な内容の定着を見ることにした。「評価問題」では、学習問題の数字を変えただけの内容で、児童が解けるかどうかみた。

解けた児童は、銅メダル→銀メダル→金メダルへと難易度が上がっていく「練習問題」を解いて、自己採点するようにした。その間、教師は、「評価問題」でつまづいている児童への個別指導に当たるようにした。

【評価問題】

【練習問題 銀】



② 児童自身による自己評価

1時間ごとに児童に自己評価（ノート）をさせることで、その時間を振り返らせると共に、教師の側もその時間の指導が適切だったかを評価できるようにした。

(4) 算数科の時間の約束

① A4用紙表裏に、授業のはじめの準備の写真と算数の学習の進め方（第3～6学年はガイド学習の仕方）をラミネート加工したものを個人持ちにすることで意識付けを図った。

② 算数ノートの使い方を統一することで、学年が上がって担任が変わっても、児童が混乱しないようにした。

(5) 尾向タイム（業前の活動）の充実

- ① 隔週木曜日の業前の時間に、「数と計算」の領域の習熟プリント（全学年分）を各学級に用意し、児童の習熟に応じて取り組ませた。その際、学習の積み重ねが分かるように実施したプリントをファイリングしていくようにした。

【算数の広場】

(6) 算数の広場、コーナーの充実

① 算数の広場

児童が算数科の学習の時間だけでなく、日常生活を送る場面でも算数科に関わる場を設けることを通して、算数科に興味・関心をもったり、基礎・基本の定着を図ったりできるようにした。掲示板の両面を活用し、「授業で学習したものの習熟を図るもの」と「算数に対する興味・関心を高めるもの」に分けた。



② 算数コーナー

既習事項を想起させる資料、定着が必要な事項は特に教室内に掲示することにより、学習意欲を高め、本時の学習内容の習得がスムーズにできるようにした。

5 教育課程外の取組

(1) 放課後の活用

- ① 本校では、児童の居住地が学校から遠いので、放課後に社会体育やスポーツ少年団活動をする児童は、いったん自宅には帰らず、マルチパーパスルーム（図書室を兼ねる）に残って、今日の宿題や家庭学習をすることになっている。

その時間を活用して、放課後、職員会議等の全職員での会合がない場合には、教師はマルチパーパスルームに出向いていき、児童の学習状況を把握して称賛したり、自分の担当学年にこだわらずどの学年の児童にも個別に指導に当たったりしている。

6 保護者・家庭・地域との連携

(1) 保護者・家庭との連携

- ① 本校独自の「家庭学習の手引き」を作成し、保護者・家庭に家庭学習の意義と効果的な学習の仕方、学習時間、学習内容を知らせ、家庭学習の習慣の定着を図るようにした。
- ② 夏季休業の終わりから9月上旬にかけて、全保護者対象に個人面談を実施した。1学期の児童の学習や生活の様子、学力検査の結果などについて、学級懇談会における全体の場では話せない内容を1対1で直接話し合うことで、2学期以降の取組を明らかにすることができた。

(2) 保護者・家庭との連携

- ① 学校通信を校区内の全家庭に配布し、学校での取組の様子を紹介することで、学校への理解を呼びかけている。

7 成果と課題（次年度の取組を含む）

- 1単位時間の学習の流れを明確にしたことで、児童が次に何をすることが把握でき、さらに意欲的に取り組むようになった。
- ホワイトボードを活用し、児童相互の教え合いや話し合いの場を設けたことで、自分の考えを表現する力が付き、話し合いを通して一番良い解決方法を見付けようとする姿が見られた。
- 算数の広場や算数コーナーを設置し、その在り方を工夫したことにより、児童は算数のおもしろさを感じ取ったり、既習内容を振り返り、問題解決をする際のヒントにしたりして、基礎的・基本的な内容の定着につながった。
- 1単位時間の評価の観点を絞り込み、学習の目標を明確にし、指導していくようにする。そして、評価基準を明確にし、指導と評価の一体化を図られるようにする。
- 授業における基礎的・基本的内容の定着をより確かなものにするために、始業前や業間のより一層の効果的な使い方、家庭（家庭学習）・地域との連携を考えていく。